

# とにけ君の最後の思い出

大村伸一

10年前にK市に住んでいた頃、彼と知り合い、長かったように思うけれど、考えてみればたった数ヶ月の間、いつも一緒にいてそして遊んだ。

その日、僕たちはM通りでかしこそうな女の子の二人組みと知り合った。その頃、彼とそして勿論僕は、かしこそうな女の子が大好きだった。

名前は、いみことくらり。名前なんかどうでもいい。気が合うことは一目で分かった。食事をしゲームセンターで遊び喫茶店で話をし僕たちの出会いは宿命だと思った。僕たちの出会いは宿命だと言うとくらりはそんなに絶望してるのとふくれてみせた。何か誤解したのかとあわてると、吹き出して冗談だと言った。

夜になると四人はすでになにをしてもおかしい状態になっていた。いみことくらり。これになむこがいたら大笑いだね。誰かがそう言ったとたん四人は腹をかかえて笑った。それからは誰か一人がなむこと叫ぶだけで全員が体をくの字に曲げて笑った。

終電がなくなると分かったとき、彼か僕かたぶんどちらかが叫んだ。遺伝子を交換しよう。彼女たちはちょっと顔を見合わせたがすぐに、おー。と声を合わせて反応した。僕たちはかくしてホテルにむかった。

いきさつは忘れてしまったが、僕たちは一つの部屋をとり、隣に並んだふたつのベッドで交換を始めた。暖かくやらかい体に僕の性欲はひどく刺激されていたがくらりも十分に欲望を育てていたことはすぐにわかった。ふれあう体のすべてがよろこんでいるような時間がすぎそろそろ決着をつけようかという頃に突然、となりのベッドで叫び声があがった。

やー。いやー。いやあああ。

セックスの喜びの表現とは明らかに異なるその叫びにあわてて部屋の明かりをつけてみると、ベッドの上に仁王立ちになった彼の股間を凝視しおびえるいみこがいた。

僕とくらしがおそろおそろ彼の前にまわり、彼女のみつめているものをみるとすでに放出した彼のペニスは萎縮しそれにすがりつくように垂れ下がるコンドームの先端には、白濁した液体ではなくなにか黒いものが溜まっていた。

それはくるりくるりとうごめき、ときどきなにか目のようなものがこちらを見つめている。よくみると、二つ頭のある小さな生き物がその中にいて、頭を交互にこちらに向けるために動き回っているのだ。

あつげにとられて彼の顔をみると、彼は頭をかき、ちょっと照れながらこう言い訳をした。

ごめん。いつもは一匹しかでないんだけど、いみこがあんまりかわいいから、興奮して二匹もでちゃったんだ。

三人はそのおどけたような口調に思わず吹き出してしまい、僕たちが何故笑い出したのかと不審そうな彼の顔をみてついに爆笑、いみこも大きな声をあげて笑いつづけていた。

それから僕たちは彼が精子とよぶその生き物のようなものを観察するため、バスタブに水をはり、コンドームからそれを解き放った。

それはしばらく水の中をうごきまわっていたが、やがて痙攣すると死んでしまった。

「死んじゃったね」「しんだね」

女の子たちが合掌し僕らは黙祷した。

朝はこのときを待っていたかのようにすぐにやってきた。

ホテルを出ると、M駅まで歩きそこで彼女たちと別れ、僕たちは地下鉄の終点で別れた。

そしてそれから彼には一度も会っていない。